『就実大学大学院教育学研究科紀要』第８号　抜刷
就実大学大学院教育学研究科　2023年３月31日　発行

近年の病弱児教育に関する文献的考察

The Literature Study on Education of Children with Health Impairments

岡　田　信　吾

近年の病弱児教育に関する文献的考察

岡田信吾

The Literature Study on Education of Children with Health Impairments

Shingo Okada

抄録

2018年から2022年に日本国内で公刊された研究論文を対象として、テキストマイニングによるレビューを行った。その結果、種別では総説が最も多く、次いで実践記録であった。また、内容についてはICT、重複障害、コロナウイルス、他機関連携、心身症、学習内容、教師の専門性、小児がんの8つのコードがネットワーク分析によって生成され、その中でも他機関連携と教師の専門性の文献数が多かった。また、その経年変化ではコロナウイルス、小児がんの増加が目立った。次に、自立活動の6区分とこれらのコードとの関連では、他機関連携、学習内容、教師の専門性と心理的な安定、健康の保持との関連がうかがえた。

キー・ワード：病弱児教育、自立活動、教育的ニーズ

１．はじめに

特別支援教育においては、医療の進歩によって様々にその対象となる児童生徒の実態が変容している。病弱児の教育は、その中でも特に変化の大きい領域の1つであろう。特別支援教育の前身である特殊教育の時代、病弱児教育が対象としてきた主たる疾病は、喘息、腎炎、ネフローゼなどの慢性疾患であった。やがて、小学校中学年から中学生頃におこってくるいわゆる心身症として扱われる問題を抱える児童生徒が小児科や精神神経科に通院や入院をし、治療・教育を受けることが課題となった。これは、現代に至っている[10)]。さらに近年では、腫瘍など悪性新生物、神経疾患、循環器疾患など多様な疾病のある児童生徒が対象となってきている[3)]。このように、病弱児の教育においては、その対象となる疾病が変容してきた。さらに近年では不登校を含む児童生徒の学習空白の解消を視野に入れた教育としての在り方が問われるようになってきた[7)]。このように、病弱児教育の在り方は時代によって、対象者もそのニーズも大きく変化してきた。したがって、日々その研究動向を把握していくことは重要である。

一方で、病弱児は、知的障害などと比較してその対象となる人数が少数である上、短期の入院であったり頻回な入退院を繰り返す者であったりと対象者が流動的である。そのため、研究報告の対象となりにくい[4)]。このような現状認識から、現在の病弱児教育の研究

の動向を把握することが重要であると考えた。

今回の調査では、過去５年間の病弱児の教育を広範に概観し、現況を把握することを目的とする。

Ⅱ　方法

レビュー対象とした文献は、CiNii research（https://cir.nii.ac.jp/）を利用して検索を行った。確認日は、2022年11月であった。

レビュー対象としたのは、2018年から2022年に日本国内で公刊された雑誌論文であった。検索語は、「病弱 and 教育」とし、Web上から本文が手に入る文献を対象とした。今回のレビューでは、近年の病弱児教育に関わる話題を幅広くリサーチすることを目的としたため、あえて大まかな検索語を設定した。確認された文献は81件であったが、文字化けにより正常にテキスト化出来ない2件を除き79件をレビュー対象とした。

分析にあたって、入手した文献を表1に示すように分類した。

表１　文献分類の視点一覧

総説	文献レビューおよび、特定のテーマについて過去の文献を調査し、結果を比較検討したもの。研究ノートとして公開された文献も総説に含めた。
量的調査	質問紙調査に代表される方法で大量のデータを入手し、統計的な手法を用いて分析したもの。
質的調査	インタビューや手記などのデータを、コード化したり内容的な関連からデータの類型化や概念、理論などを示すもの。
実践記録	授業記録を含む指導・実践の過程を記録しまとめたもの。
大学実践記録	大学における講義記録や、教員養成のための教育課程などをまとめたもの。
介入研究	仮説を検証するために対照群またはベースラインの設定し、統制された介入の効果を統計的に示したもの。

自立活動については、学習指導要領解説自立活動編[6]をテキスト化して分析を行った。

なお、分析は、全てKH coder（Ver. 3,Beta.04）[1]を利用したテキストマイングによる。

Webから入手した文献は、Googleドライブ上でGoogleドキュメントを使用してテキスト化した。

Ⅲ　結果と考察

1．公刊された文献の種別の経年変化について

図1に公刊された文献の分類とその経年変化について示す。公刊された文献数は、2021年が27件と突出して多いが、例年11件から15件程度が公刊されている。また、その分類種別では、総説が31件で最も多く、続いて量的調査、実践記録ともに19件、質的研究8件、大学実践記録3件、介入研究1件であった。

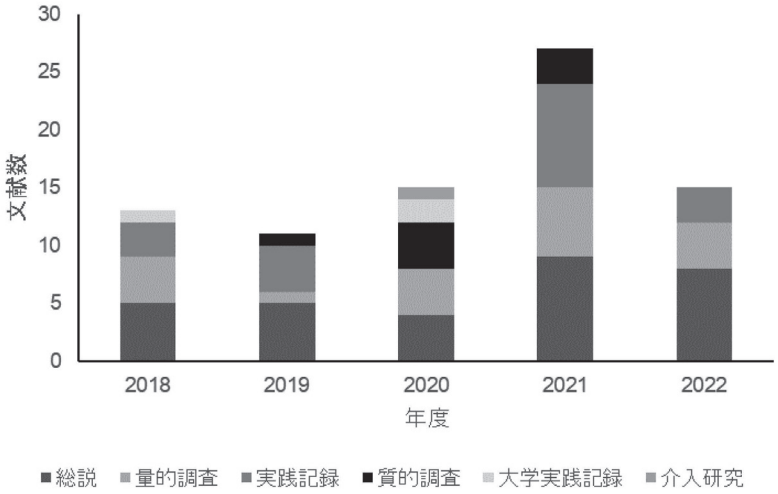

図 1　公刊された文献の種別の経年変化

2. 自立活動の内容分析

学習指導要領解説（自立活動編）[6] を区分毎にネットワーク分析し、その区分を特徴付けると考えられる語（コード）を抽出した。この手続きによって抽出したリストを自立活動コードと表記する。自立活動コードの一覧を表2に示す。語の分析にあたって、出現数が多くどの項目にも共通して出現する語（ex. 児童　生徒　指導　重点　など）は事前に除外した。また、後の分析で差異が出やすくなるよう7語程度を選択するようにした。

表2ネットワーク分析によって抽出された自立活動の6区分を特徴付ける語（自立活動コード）

身体の動き
運動　or　動作　or　身体　or　姿勢　or　保持　or　補助
コミュニケーション
コミュニケーション　or　手段　or　言語　or　文字　or　言葉　or　表出
環境の把握
視覚　or　聴覚　or　感覚　or　概念　or　認知　or　環境　or　情報
健康の保持
病気　or　管理　or　健康　or　リズム　or　保持　or　覚醒
心理的な安定
意欲　or　安定　or　困難　or　情緒　or　周囲　or　心理　or　学習
人間関係の形成
人間関係　or　集団　or　他者　or　感情　or　表情

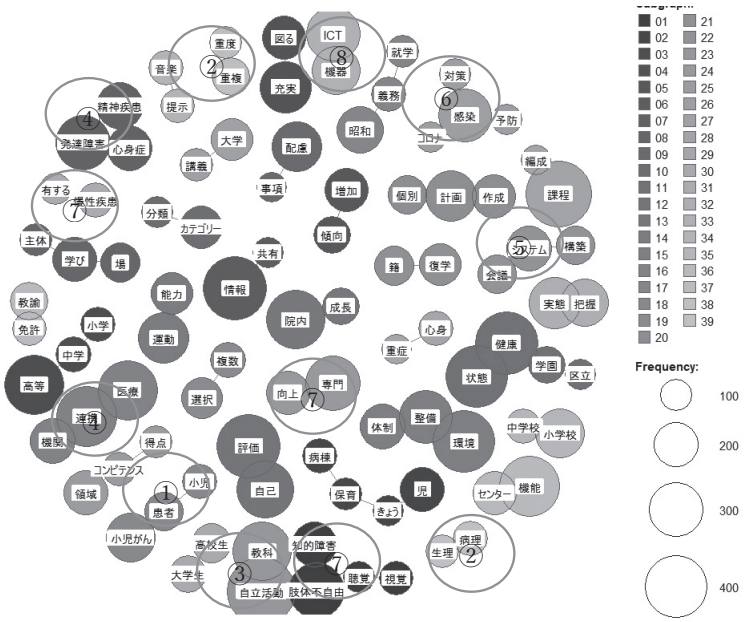

図 2　全文のネットワーク分析結果

3. 公刊された文献の内容分析

入手した79件の文献の全テキストを対象にテキストマイニングを行った。

総抽出語は445,564語、また総使用語数は12,108語であった。使用された全ての語のリストから、研究の目的とした個々の文献の差異が強調される語は、出現頻度500～90の語が該当していた。そのため、これ以降の分析は出現頻度500～90の語を対象とした。

（ア）文献の内容分析

図2に全文のネットワーク分析結果を示す。ここから､内容に関して8つのコード（以下、内容コードと表記する）を生成した。①は機器、ICTから構成され「ICT」と命名した。②は、知的障害、肢体不自由、重度、重複から構成され「重複障害」と命名した。③はコロナ、感染、対策、予防から構成され「コロナウイルス」と命名した。④は機関、連携、医療、構築、システム、会議から構成され「他機関連携」と命名した。⑤は心身症、精神疾患､発達障害から構成され「心身症」と命名した。⑥は教科､自立活動から構成され「学習内容」と命名した。⑦は生理、病理、慢性疾患、専門、向上から構成され「教師の専門性」と命名した。⑧は小児がん、患者から構成され「小児がん」と命名した。

構成された内容コードの経年変化を図3に示す。最も多く出現した「他機関連携」と「教師の専門性」については､2020年が最も多く近年はどちらかというと減少傾向にある。「学習内容」については、2018年、2021年が多い。また、「ICT」については、2021年が突出して多い。「心身症」についてはどちらかという減少傾向にある。さらに、近年の目立った話題として「コロナウイルス」､「小児がん」の増加があった。

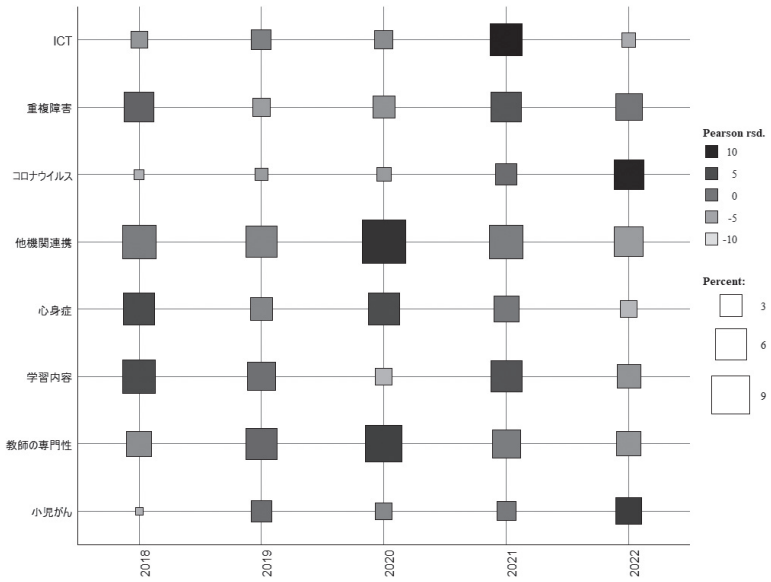

図 3　内容の経年変化

4. 自立活動との関連

自立活動コードと全文献の対応分析を行い、自立活動の項目と文献の関連度を算出し自立活動コードによる文献の分類を行った。

自立活動コードの経年変化を図4に示す。最も多く取り上げられた区分は、「心理的な安定」であった。次に多いの「健康の保持」と「環境の把握」であった。「コミュニケーション」と「人間関係の形成」については少なかった。経年変化については、「健康の保持」の減少傾向があったが、その他は、目立った傾向は観察されなかった。

次に、自立活動コードと内容コードとの対応分析をおこなった。図5にその結果を示す。自立活動コードについては、「人間関係の形成」、「心理的な安定」、「健康の保持」が原点付近にあった。また「身体の動き」、「コミュニケーション」、「環境の把握」については。外側に配置されていた。また、内容については、「他機関連携」、「学習内容」が原点付近に配置されていた。また、「小児がん」、「コロナウイルス」と「教師の専門性」も比較的原点の近くに配置されていた。自立活動コードと内容コードとの関連では、「環境の把握」と「ICT」、「コミュニケーション」と「重複障害」が近くに配置されていた。「心理的安定」と「健康の保持」に関しては、「教師の専門性」、「地域連携」、「学習内容」が近くに配置されていた。一方で、「人間関係の形成」は、特定の項目と関係は見られなかった。

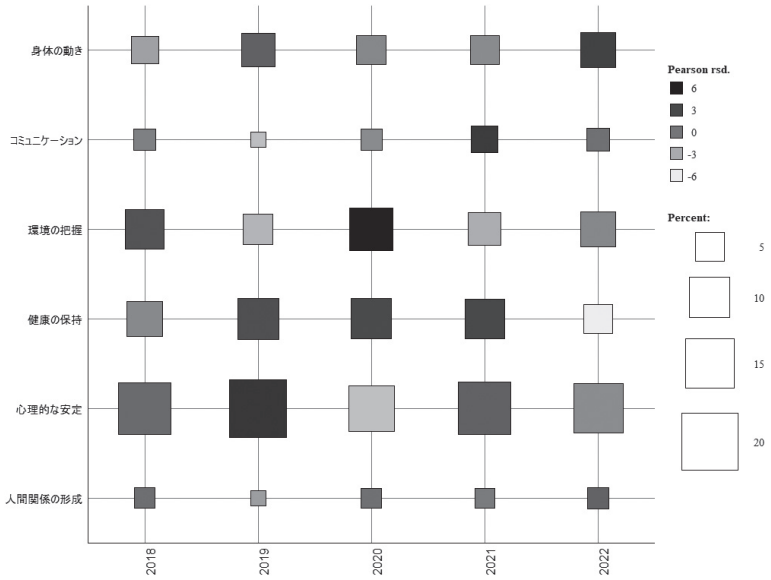

図 4　自立活動コードの経年変化

Ⅳ　総合考察

2018年より現在までの5年間における病弱児教育に関する研究を概観するため、国内で入手可能な79件の研究論文をテキストマイニングによって分析した。その結果、種別では、総説が最も多く、仮説を設定した実験的な介入研究は5年間でわずか1件であった。

次に内容に関しては、「他機関連携」が最も多く取り上げられた話題であったが、近年では減少傾向であり、それにかわって「小児がん」の増加が目立った。また、近年の状況から「コロナウイルス」に関する話題も増加が著しい。

自立活動との関連では、「心理的な安定」、「健康の保持」、「人間関係」の形成が原点に近く、内容との関連では「学習内容」、「他機関連携」、「教師の専門性」が原点近くに配された。これらのことから、病弱児の教育において、「心理的な安定」が「他機関連携」や「学習内容」と関連を持ちながら重点的な話題となっていることがうかがえる。病弱児の教育においては、入院中だけでなく退院後も継続した医療対応が必要であったり、学籍の変更に伴う学校間の連携、福祉施設などの連携であったりと関係する機関が多岐にわたる。そのため、教師自身が連携に困難を感じていることが報告されている[2)]。また、近年、森・田中（2015）[8)] は、病弱児の抱える心理社会的問題について、全ての疾患に共通する問題と疾患毎に特有の問題があることについて文献レビューから言及している。その中で、近年文献数が増加傾向のある「小児がん」との関係については、治癒率の向上に伴って過酷な治療経験に起因するPTSDがあることに触れている。病弱児の教育においては心理的負担の軽減のために、ストレス対処行動の指導が重要である。このことは、自立活動の「心理的な安定」として扱われることが多く、今回の文献レビューで把握した内容と合

致している。

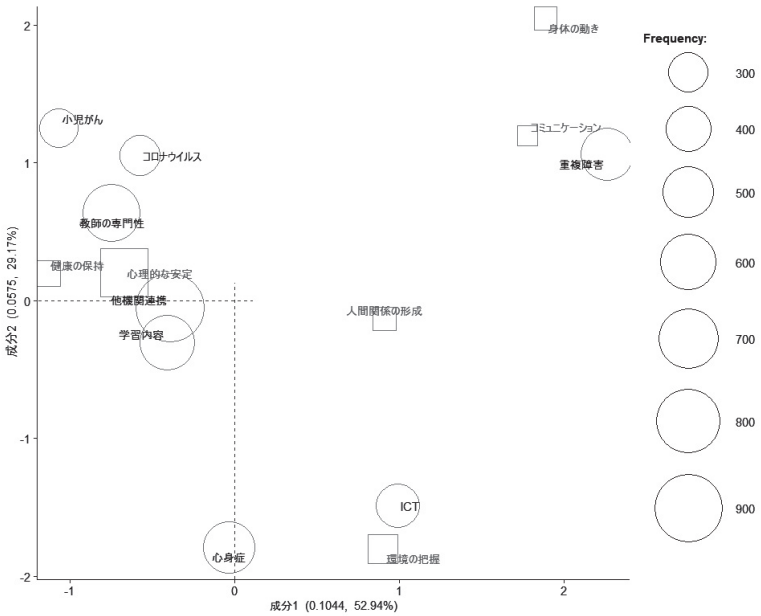

図 5　自立活動コードと内容コードの対応分析結果

次に、病弱児の教育において、2019年突如としてパンデミックを起こした新型コロナウイルス感染症の影響は大きい。真鍋・任・井上ほか（2022）[5] は小児がん患者を対象として、新型コロナウイルス感染症の蔓延の影響を、親の負担増加の側面と、デジタル化・オンライン化の側面から整理している。特に、デジタル化・オンライン化の側面から、遠隔操作ロボットを用いた実践を報告している。滝川（2013）[9] は2013年時点において、今後の病弱児教育における課題が、ICT活用の発展であることを強調しているが、全ての教育場面でWeb会議システムを用いた授業実践はあたりまえの技術となった。これは、社会の変容にともなう意図せぬ進歩であった。

社会の変容の大きい現代において、病弱児の教育も外的な要因によって大きく様変わりすることが新型コロナウイルス感染下で示された。また、今回の分析では示されなかったが、医療の変化に伴って、入院期間の短縮や病弱児教育の対象となる疾病の変容も予想される。しかし、どのように社会が変容しようとも心理社会的な問題を抱え病気と闘う子どもがいなくなることはない。定期的に研究を概観し、何が病弱児の教育において重点となるか観察していく必要がある。

文献

1）樋口耕一 . (2020). 社会調査のための計量テキスト分析 ―内容分析の継承と発展を目指して― 第2版 . ナカニシヤ出版 .

2）平賀健太郎 . (2006). 通常の学級において病弱児への教育的支援を困難と感じる理由―今日を対象とした自由記述の分析を通して―. 大阪教育大学障害児教育研究紀要 (29), 71-78.

3）日下奈緒美 , 森山貴史 , 新平鎮博 . (2014). 慢性疾患を持つ児童生徒の特別支援学校（病弱）および病弱・身体虚弱特別支援学級の在籍に関する疫学的検討 . 国立特別支援教育総合研究所ジャーナル (3), 18-23.

4）任龍在 , 池田彩乃 , 安藤隆男 . (2009). 肢体不自由教育と病弱児教育おける重度・重複生涯教育の研究動向と課題―日本特殊教育学会発表論文集に着目して―. 筑波大学特別支援教育研究 , 4, 19-23.

5）真鍋健 , 任龍在 , 井上富美子 , 日野もえ子 , 濱田洋通 , 北島善夫 , 石田祥代 . (2022). 学校教育の各現場で求められる特別支援教育の今日的な課題（その４）―小児がん患者への切れ目のない教育的支援とその課題―. 千葉大学教育学部研究紀要 , 70, 213-220.

6）文部科学省 . (2018). 特別支援学校教育要領・学習指導要領解説　自立活動編（幼稚部・小学部・中学部）.

7）文部科学省 . (2021). 不登校児童生徒等又は療養等による長期欠席生徒等を対象とする特別の教育課程を編成して教育を実施する学校に関する指定要項（改正）.

8）森浩平 , 田中敦士 . (2015). 病弱児の抱える心理社会的問題に関する文献的考察 . 琉球大学教育学部紀要 (85), 117-122.

9）滝川国芳 . (2013). 日本の病弱・身体虚弱教育における教育情報の共有と活用に関する研究動向 . 特殊教育学研究 , 51(4), 391-399.

10）玉村公仁彦 , 山崎由可里 , 近藤真理子 . (2012). 病弱教育の歴史的変遷と生活教育―寄宿舎併設養護学校の役割と教育遺産―. 和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要 (22), 147-155.